

創造的な演奏活動に高い評価

札幌市民文化奨励賞受賞さる

新都山流尺八大師範 中島 聖 山師



市長より表彰状を授与される中島聖山師

平成5年度の札幌市民芸術賞、市民文化奨励賞の贈呈式が平成五年十一月十六日、ホテルニューオータニ札幌で行われ、式終了後、札幌市長および各賞の既受賞者等関係者多数を迎えての祝賀パーティーが和やかに開催された。今回の受賞者は七名、中島聖山師は次のように市民文化奨励賞（邦楽部門）を授与された。

『昭和四十二年より尺八を始め、創造的な演奏会を企画実施し、邦楽の振興につとめている。現代曲などの演奏会には欠かすことのできない存在とまでいわれるほど、その実力は高く評価されている。また子供たちや外国の人々にも理解してもらおうとさまざまな活動を行っており、本市の芸術文化振興に貢献している。』

このように、分野での活動歴はまだ二十余年、受賞者としても異例の弱冠四十八歳だが、尺八の世界に傾倒して以来の今日までの凝縮した研鑽ぶりが、この栄養に輝いたといえよう。

聖琳社の社中活動をその基盤として中島聖山（以下敬称略）は、昭和四十三年都山流尺八大師範の江部松山に

師事して本格的な尺八の修業を始めたが、早くも同四十五年に準師範試験、同四十八年に師範試験に合格して中島聖山を号し、同五十四年位は大師範に昇格する等その進展ぶりは著しいものがあった。

中島聖山はこうした自らの尺八の修業の一方、早くから後継者の育成を志し、昭和四十五年の準師範合格とともに、早くも門弟の育成を始めており、師範となった同四十八年には、社中を聖琳社と命名して、以後多くの門人を輩出していった。今日まで育成した門下生は百余名を数え、既に二十余名に及ぶ有資格者を送りだしているが、特に異質な特色としては、外国人の門下生を多く輩出する等、後に海外交流への積極的な参加を促す要因を早くから育んでいったことだろう。

こうした経緯をたどりながら、聖山は門弟の育成をつとめる一方、その間自己の演奏技術の向上にも真剣に励んでいた。師範となった昭和四十八年には三曲合奏のための研鑽として、箏・三絃を創明音楽会の小野衛に師事、また後年横山弘艶に胡弓、雅楽会の荒川昭治に笙を学んでいった。一方尺八の研鑽のためにコンクール等にも相次いで参加をしており、昭和五十年には札幌市の邦楽オーディション合格、北海道三曲コンクール尺八部門第二位、同五十二年には北海道山流尺八本曲コンクールで第一位入賞。そして同五十三年にはNHKのFM全国放送「きょうの邦楽」にも出演を果たしている。これらを背景として門人等にも邦楽オーディション等には積極的な参加を勧め、既に四名の合格者を得てい

